

設立30周年記念講演

人・巡り会い四国遍路(小さな小さなコンサート)

講師:オカリナ奏者/本谷美加子





皆さま、こんにちは。本谷美加子です。

今日はこのような場でお話させていただくことができまして、たいへん光榮に思っております。

これまで、オカリナを演奏する公演の方は何度も行ったことがあります。言偏のつく方の講演は今日が初めてでございます。

うまくいきましたら、南無大師遍照金剛。いきませんが、南無大師遍照金剛ということで、どうか、よろしく願いいたします。

まずは、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、北海道、帯広というところで生まれ、育ちました。高校を卒業してしばらくしてから、オーストラリアへ旅立ちまして、その一年の滞在の間に、ストリートでオカリナを吹いたことが、奏者となる最初のきっかけとなりました。

オカリナは子供の頃から吹いておりましたが、もちろん、ピアノやバイオリンとは違いますので、特別なレッスンを受けたわけではなく、おにんぎょさんやおもちゃで遊ぶように、自然に吹いて参りました。

オーストラリアから戻って、日本でも、新宿や池袋などの駅で、ストリート演奏を行っているうちに、曲も作るようになりました。

私は、たいてい自然の中を歩きながら曲を作ります。

例えば、陽のきらめき、風の肌触り、草木や土の匂い、水のせせらぎ、かわいらしい草花などに心ときめいた時に、旋律が浮かびます。

私は、自分の吹く旋律しか作りませんので、作曲というより、旋律という一本の糸で詩を編むような感じだと思っています。

私にこのような感覚を育んでくれたのは、ふるさとの北海道の豊かな自然だと思っています。

私のふるさと帯広は、北海道、十勝平野の真ん中にありまして地平線まで畑が続き、西には日高山脈が悠々と連なっているところ。そして、空は、いつも青く、年間を通して8割以上晴れています。その十勝の青

空には、「十勝晴れ」という名前がついているほどです。私は、そういう北の大地で、のんびり、のほほんと、気づいてみたら大きくなっていったというわけです。

オカリナのことも簡単にご紹介させていただきます。オカリナはイタリア生まれの楽器です。イタリア語で「オカリーナ」の「オカ」は、「ガチョウ」、「リーナ」は縮小辞で、日本語で言うと「ちゃん」のような言葉。「オカリーナ」は、「ガチョウちゃん」、「小さなガチョウ」という意味です。また、「オ」を除いて、「カリーナ」だけだと、「かわいらしい、魅力的な」という意味になります。

「オカリーナ カリーナ」は、「かわいらしい、魅力的なオカリナ」という意味になります。

オカリナは、粘土から作られた焼き物の笛、土から生まれました大地の笛です。

このように大きなもの、小さなもの、自分で作ったもの、頼んで作ってもらったもの、市販のもの、いろいろなオカリナがあります。

実は、私はいま、オカリナの音の科学的研究を、ある大学の先生と一緒にしております。今年の9月に、徳島大学で「応用物理学会」というのが開かれまして、なんと、私が、その学会で研究発表をいたしました。

オカリナと科学、また、私と科学は対極にあるような印象ですが、この研究では、いろいろと興味深い結果が出て来ていまして、私はこの研究を、より魅力的なオカリナを自分の手で作るための、ひとつの手段として、役立てたいと考えています。

では、ここで、自己紹介として、1曲、演奏させていただきます。

この曲は、数年前に「続・のほほん茶」のCMで、テレビで流れていた曲です。

「たんぼぼぼ」お聴きください。

～ M1 たんぼぼ ～

では、高知と私とのご縁をお話させていただきます。

私は93年にCDデビューいたしました。その時のレコード会社の社長が高知出身の方でしたので、その繋がり、当時高知新聞の東京支局長をしていらっしゃいました森健志郎さんという方と知り合うことになりました。

森さんを通じて、高知の方々との素晴らしい出会いをたくさんいただきましたし、森さんと出会った93年以来、高知ではほとんど毎年オカリナの演奏の機会をいただいで来ておりますので、年を追うごとに、高知と私とのご縁は、どんどん深まっているように思います。

高知には毎年必ず何度か来ておりますので、2000年、平成12年の秋に、高知県立美術館で空海展が開かれた時、ちょうど高知におりまして見に行きました。この時は、もちろん、その半年後に自分がお遍路さんになるとは、思いも寄りません。ただ、ものすごい空海人気に圧倒されたのを覚えています。

そうしたら、およそ半年後、平成13年の3月に、突然、香川県の西日本放送から、「お遍路さんになって四国をまわってみませんか」というお誘いをいただいたのです。

実はその時に、私の頭にぱっと浮かんだのは、さぬきうどんのことでした。

私は食べ物に蘊蓄を傾ける趣味はありませんで、普段から、何を食べるか、より、誰と食べるか、の方が大事だと思っていますから、「ん～、まったり」とか何とか言うのはどちらかというと嫌悪しているのですが、こと、さぬきうどんに関してだけは例外なのです。

さぬきうどんに出会ったのも、やはり、92年か3年頃だったと思います。オカリナの演奏の仕事で、高松に初めて行きまして、その時に、さぬきうどんとの衝撃的な出会いがありました。

まず、目の前に運ばれて来た瞬間の驚き。その透明感、艶やかさ、そして麺にはきっちり角があるではありませんか。どんぶりの中で凜としているその佇まい。そして、口に運ぼうとすると、うどん自らが勢い良く踊り

込んで来るではありませんか!「これは今まで私がうどんと思って来たものとは全く違う!」まさに、私の中でうどん革命が起こったとしか言い様のない衝撃でした。

なぜかいつもオカリナよりも熱くさぬきうどんのことを語ってしまうのですが、十年以上に渡ってあちこちでこのように熱く「さぬきうどん」を語って来たせいかどうか、さぬきうどんの方は、いまや大ブレイクとなりましたが…

そんなわけで、四国遍路のお話をいただいた時には、これは「赤い糸」ならぬ「白い麺」が結んでくれたご縁だと思い、なんの迷いもなく、「はい、やらせてください。ぜひ、全部歩かせてください」と、答えました。

そうして、私の四国八十八ヶ所歩き遍路は始まりました。

それでは、まずは、「大地の旅」という曲をお聴きください。

～ M2 大地の旅 ～

私の四国八十八ヶ所歩き遍路は、「風に抱かれて～本谷美加子の四国巡礼」という15分のテレビ番組となりまして、毎週一回、平成13年の4月から、平成14年の12月まで、1年9ヶ月に渡って放送されていました。

実際の旅は、放送日よりおおむねひと月早く進行していきまして、基本的に、ひと月に1度四国に通いまして、原則として一日一か寺、月に四～五か寺のペースでまわりました。

もちろん、本当に全部歩いたのですが、すごいところは、歩いたのは私だけではなく、他に、カメラマン、音声さん、ディレクターの三人が、私と一緒に全部歩き通したところです。

番組の主旨は、一人の女性(私のことですが)が、歩き遍路を体験して、何を感じ、どう変わって行くか、ということでした。そのために、できるだけ普通の歩き遍路の方とかわらない体験をしなければいけませんでした。およそ1400キロの道のりを完全に歩き通すこ



とは絶対の条件。そして、お接待をしてくださる方や他のお遍路さんなど、人々との出会いは、番組の中で重要な要素でした。

ですから、自然な出会いの妨げにならないように、カメラマン、音声さん、ディレクターの3人は、いつも私のおよそ20メートル後ろを、知らん顔をして歩いていました。

私の白装束の下には2つのマイクが仕込まれていました。一つは胸元に、そしてもう一つは出会った人の声を取るため袖口にありました。

後ろのスタッフは、イヤホンでマイクが拾う音を常に聞いていて、出会いやドラマを逸早く察知し、さっと撮影体制に入るわけです。

独り言や鼻歌も聞かれてしまうので、これにはたいへん不自由な思いをしました。

一日が終わると、私は日記を書いて提出します。その日記を参考に、最終的にプロデューサーによってナレーション原稿が書かれて、番組となりました。

1400キロの道のりを歩き通した四国八十八ヶ所歩き遍路。旅の期間は、1年9か月。旅の延べ日数は、110日となりました。

旅の始まりは、何もかもが新鮮でした。

田舎の細道。田んぼのある風景。家の造り、瓦屋根から伸びる雑草、軒下に吊るされた玉ねぎ、など、‘へんろ道’から見る風景は、のどかで日本らしいと思いました。こういう風景の中で生まれ育ったわけでもないのに、懐かしい感じがしました。

オカリナの音色もよく、「初めて聞くのに懐かしい」と言われるのですが、

‘へんろ道’もまさしくそうで、初めて歩くのに懐かしいものでした。

他のお遍路さんや、お接待してくださる方々との出会いもとても嬉しくて、その月の遍路が終わると、早く次の月の遍路の時が来ないかと思っていました。

徳島県、17番札所、井戸寺でのことです。

井戸寺には、日を限ってお願いごとをしたら叶えてくれるというお大師様、「日限り大師」があります。例えば、「1か月タバコをやめますので試験に合格させてください」とか、「3か月お肉を食べませんので10キロの減量に成功させてください」といった具合にお祈りをするのです。

井戸寺へ行ったのは、6月の遍路の初めの日、それから1週間遍路をする予定となっていましたので、私は、「一週間お酒を飲みませんので、美しいメロディーが閃きますように」と、「日限り大師」にお祈りしました。

しかし、やはり、歩いた後のビールほどおいしいものはありません。なんと、その日のうちに誓いを破り、ビールを飲んでしまったのです。

後日、番組プロデューサーにこのことを話し、「そのおかげで今回は美しいメロディーが閃きませんでした」と言いましたら、「な～んや、『一週間毎日お酒を飲みますから』って祈ればよかったんや。オレやったら『毎日お酒を飲みますからパチンコ勝たせてください』ってお願いするんやけどなあ」ですって。

プロデューサーは大天才だったのです。

それでは、「陽気なヨッパライ」という曲をお聴きください。

～ M3 陽気なヨッパライ ～

旅の始まり、1番札所、壺山寺で、ご住職さんから「十善戒」をさずけられました。

不殺生、不…

殺してはいけない、盗んではいけない、嘘、悪口、二枚舌はいけないなどなど、十の戒めの言葉を授けられました。

私は、たいへん真面目なものですから、これを全部守らなければならないと思って、日々、かなりの努力しておりました。

私は遍路をしている1年9ヶ月の間は、実際に‘へん

ろ道'を歩いている時でなくても遍路の途中とおもっておりましたので、普段、日常の中でも常に、お大師さまに忠実な、よい「お遍路さん」であるよう心がけていました。

遍路を始めてからしばらくの間は、蚊がブーンと来ても殺しませんでした。

しかし、徳島県20番札所、鶴林寺の境内で、ディレクターと打ち合わせをしていましたら、ディレクターのおでこに蚊がとまったのです。ちょうどその時、ディレクターに少しばかり恨みがありましたので、「いまだ!」とばかりにディレクターのおでこをパンと叩いて蚊を殺したのです。蚊を取るには強過ぎやしないかと、まわりのスタッフには、ウケていましたが…。

今振り返りますと、それまで楽しく嬉しいだけだった遍路に、この頃から苦悩が加わって来たように思われます。

これは、国道55号線。室戸岬へのへんろ道です。

徳島県最後の札所、23番薬王寺から、高知県最初の札所、24番最御崎寺までは、およそ80キロの道のりになります。そこを歩いたのは、7月はじめの猛暑の中のことでした。3泊4日で歩いたのですが、最初の日は、全国的な猛暑で、熱中症による死者が何人か出た日でした。

強烈な陽射しを避けるため、朝5時に歩き出しましたが、ものの5分もしないうちに、白装束は汗のしずくが滴るほどでしたが、実は、私はけっこう試練好きなどころがありますもので、つらいとは思わず、かえって、その厳しい暑さに、闘志を漲らせておりました。

感受性の豊かな幼児期に『巨人の星』を見て育ったことが、その原因かと思われませんが…。

この室戸岬への‘へんろ道’は、現在、このように国道55号となっていますので、猛スピードの車が、白装束の袖をかすめるように、びゅんびゅんと走り抜けて行きます。

排気ガスを吸ったり、クラクションの爆音に飛び上がったりしながら、歩いていますと、やはり、心は闘争的に

なってくるものでした。それまで田んぼの中や山道を歩いているときの、ののどかな気分とは全然違う気持ちをはじめて‘へんろ道’で味わいました。

3泊4日かけて80キロの道のりを歩いて室戸岬の24番札所、最御崎寺に到着したわけですが、私は、そこで、境内でお祈りを終えて、振り返りますと、ぱっと、こう、見渡す限りに広がる真っ青な空と海があるものだと思っていたのです。そして、その見渡す限りの空と海を目の前にしまして、「ああ、ここまで歩いて来た甲斐があった」と、感涙にむせぶ予定だったのです。

これまで旅先で、人間の小ささを思い知り、思わず悔い改めてしまうような壮大な景色に出会ったことが何度かあります。そういった感動が80キロ歩いた先の室戸岬にあるものだとばかり思っていた、ことに気づいたのです。

しかし、最御崎寺の境内からは、そのような壮大な景色は見えませんでした。これまでと同じような、普通の境内と団体のお遍路さんの姿があるだけでした。

ショックだったのは、その期待を裏切られたこと、ではありませんでした。

そんな陳腐なドラマをご褒美として期待して歩いて来た自分の心に気付いたことでした。

「なぜ歩いて来たのだろうか」

「なぜこれから先も歩くのだろうか」

この時から、私は自分に、こう問い続けながら歩くことになりました。

さきほどから、スクリーンに写真が写っておりますが、最初にこの白装束を身につけた時には、やはり、少し気恥ずかしいような感じがいたしました。

しかし、この白装束姿が、あちこちで評判が良くて、「かわいい」とか、「学生さんですか」とか、いろいろ褒められるものですから、ずいぶん気をよくして歩かせていただいたものです。



高知県の27番札所、神峰寺へ向かう途中、とある静かな古い家並みを歩いてたときのこと、「お遍路さん!」と呼ばれたような気がして振り返りました。が、あたりに人影は見えません。

あまりの暑さに幻覚症状が起こったかと思い、頭を二、三度かろく振って、歩き出そうとしましたら、また「お遍路さん!」の声。

よく耳を澄ましてみると、簾の向こうから声が聞こえて来るようです。

「お呼びですか?」と、簾に向かって呼び掛けると、「どうぞお入りください」との返事。

簾をくぐって中へ入ると、おじいさんがベッドに腰かけていらしゃいました。

「お若いのにえらいですなあ」と、ねぎらいの言葉をかけてくださるおじいさんは、膝や腰を痛そうにさすっています。

おじいさんは、痛む体をやっとなげ持ち上げて立ち上がり、私に一握りの硬貨をお接待してくださいました。

「ありがとうございます。よろしければ、オカリナで何か一曲吹かせていただきたいと思いますが、好きな曲はありますか?」と、頭陀袋からオカリナを取り出して、おじいさんに尋ねました。

しかし、おじいさんは、私の顔を見つめたまま黙っています。

しばらくたってから、おじいさんは、ぼつりと、「般若心経」。

「ぼっぼぼぼーぼーぼーぼーぼーぼーぼーぼー……」と、同じ音を吹き続けるわけにもいきませんので、少し強引ではありましたが、「おじいさんはきっとこの曲がお好きでしょう」と、「あかとんぼ」を吹きました。

おじいさんは、じっと私の顔を見つめて聴いてくれています。

最後までじっと聴いてくださり、吹き終わってもまだ、じっと私の顔を見つめたままでした。

「般若心経」じゃなくておじいさんおこってるのかな…

『般若心経』を唱えた方がよかったのかな…』と、心配していましたが、しばらくしてから、おじいさん。

「いやあ、しかし、ぱっと見は、ずいぶんお若くお見受けしましたが…よおく見ると…ふ…ふ…ふうかくがありますなあ」と。

おじいさんはじっと言葉をさがしてくれていたのです。

それでは、「あかとんぼ」をお送りします。

あまり見つめずにお聞きくださいましたら幸いです。

～ M4 あかとんぼ ～

高知県に入ってから、私の中に得体の知れない憤りが沸き起こって来ました。

べつに、おじいさんに「ふ、ふ、ふ…」といわれたから怒っちゃったというわけではありませんし、高知県に入ってから誰かに意地悪されたわけでもなく、高知の人々、みんなに、あたたかく、よくしていただいて、親切にお接待していただいているにもかかわらず、憤りがあったのです。それは、いま考えると、「なぜ歩くのか」の答えをいつまでも教えてくれないお大師さまへの反抗心のようなものだったのかもしれない。

「なぜ歩くのか」わからないままに歩き続けるということに苛立ちがつのっていた頃、37番札所、岩本寺に到着しましたら、ご住職の奥様が、「八十八か所を歩き終えたら、必ず違う人生があります」と、きっぱりとおっしゃってくださいました。

あまりにもきっぱりとした口調でしたので、嘘であろうはずがないと思えました。とにかく、いまはその言葉を信じていけばいいのだと思いました。

岩本寺まで一緒に歩いたお遍路さんがいます。

たいへんな健脚の方でした。

香川県から来たこの方は、四国遍路5回目。歩き遍路は2回目とのことでした。

この方、7年前に息子さんを亡くされたといひます。

息子さんにとって、現代社会の中での会社勤めは、あまりにストレスが大きかった。ストレスのせいで、首から下が全く動かなくなった。リハビリで回復し、勤めに戻った。今度は、ストレスによる記憶喪失となった。婚約者がいたが、息子さんには自殺の可能性があったため、婚約解消となった。より自殺の可能性が高まった。何とか生きてほしいと願う親の必死の思いで、息子さんに、婚約解消になったのは自分のせいじゃなく、親のせいなのだと思わせた。親を恨むことが生きるエネルギーとなってほしいと祈った。しかし、息子さんは交通事故で亡くなった。記憶喪失のまま、親を恨んだまま、亡くなってしまったのだといいます。

話しながら、男性は、ずっと私を気遣って必ず車道側を歩き、歩道が細くなると車道に降りて、歩いてくれました。

歩いている時、「よいこと」や「前向きなこと」を考えると、時間も距離も短く感じる。「よからぬこと」、「後ろ向きなこと」を考えると、時間も距離も長く感じる。

この方に、先日、香川県でコンサートを行いました時にお会いしましたが、あれからさらに遍路の回数を重ねたとおっしゃっていました。

今週の『高知新聞』の連載に書かせていただいた方ですが、27番札所神峯寺からの山道を下って行く途中に出会ったお遍路さんがいます。向こうからこの方が登って来たその方を一目見て私は、「遍路一周目ではなさそうだ」と思いました。何となく迫力のようなものを感じて、そう思えたのです。

「こんにちは」と、挨拶を交わし、「どちらからですか」と何うと、「青森から歩いて来ました」との答え。驚く私に、その方は自分のことを話してくれました。

男性は、青森県生まれ。幼い頃に両親を亡くし、孤児院で育った。その後、20年間会社勤めをし、役職にも就いていた。ところが突然のリストラ。到底納得できるものではなかった。心の中のすべてが崩壊した。恋人、

友人、お金、すべてを捨て、青森を去った。身ひとつ、行くあてもなく、ただ歩いた。死ぬつもりだった。

いつか四国に入っていた。たまたまだった。室戸岬まで歩いたら、そこから飛び込んで死んでやろうと思っていた。そんな時、あるおばさんに出会い、その人から、自殺しそうに見えるからと、遍路を勧められた。

結局、死を思いとどまり、八十八か所すべてをまわり終えた。八十八番、大窪寺で結願の時には、涙が溢れて止まらなかった。

そしていま三周目を歩いている。

一周目のときは、誰とも口をきかなかった。挨拶すらしなかった。そんな自分が、いま、こんなことを話しているのが信じられない思いだ。自分はもう大丈夫。これを最後の遍路とするつもりでいる。

いまは、お金はないけれど心はものすごく豊かになった。両親の供養もできた。いまは、すべて、お大師さまに導かれているように思える。

男性は穏やかな笑顔で話してくれました。しかし、乗り越えたけれど、哀しみは小さくなったわけではない。今もなお、心の中には大きな哀しみを抱えているように感じられました。

よく、無料休憩所などに、ノートが置かれていまして、そこに歩き遍路の方々のつぶやきが書かれているのですが、死ぬつもりでやって来て、死を思いとどまったお遍路さんも現実に何人もいることがわかりました。





四国を歩いて、いろいろなお遍路さんに出会い、いろいろなお話を伺いました。

還暦を迎えて人生の区切りとして歩く方。

リストラにあわれた方。

若者や若い女性のお遍路さんにもたくさん出会いました。

身近な人を亡くされた方。

ご本人や肉親の病氣平癒を祈る方。

恋人と別れて。

信仰のために。

修行のために。

体力試しに。

トレッキングのつもりで。

以前から興味があって。

どうしてかわからないけれど歩く人。

いろいろな人に出会って、お話をうかがって、いろいろな人生があることを知りました。

そして、四国に住んでいる方々との出会いからは、いつも、あたたかいお接待の心を教えていただきました。

そして、四国の自然の中を歩いて、自然の偉大さ、自然の癒しの力を教えられました。

古代ギリシャの医聖、医学の父とも呼ばれています、ヒポクラテスは、「人は、自然から遠ざかるほど病気に近づく」と言ったそうです。

遍路をしてから、「自然に近づきたい」と、以前より一層強く願っておりますが、現代社会の中で、自然に近づくこと、自然体になることは、たいへん難しいことのように思えます。

私はここ数年、コンサートのときは、裸足で演奏することにしています。それは、裸足で大地を踏みしめることを実感して、土の笛オカリナで、大地から、身体、オカリナまで一体となった音楽を奏でたいという願いからなのです。

私は、遍路をはじめた頃までは、演奏活動の都合などで、長い間、東京で暮らしておりました。しかし、遍路をしているうちに、都会の暮らしに疲れ果ててしまい、自然の美しいところへ引っ越すことになりました。この時、本当に高知へ引っ越して来ようとも考えたのですが、やはり演奏活動の都合から、それはあきらめざるをえず、結局、小田原へ引っ越しました。小田原も高知のように、海あり山ありの、たいへん美しいところなのです。

その小田原で、全国ニュースにもなりましたが、今年の4月に断水がありました。

断水になってみると、生活の中で、あらゆることに水が必要だったことに、あらためて気づかされました。

4泊5日に渡る断水で、その間、近くの中学校に置かれた給水車から、ポリタンクに水をもらって来て暮らしていました。お料理のときは、流し台の上にドンと置かれたポリタンクの水を、できるだけ効率よく使おうと、きれいな野菜の順から洗ったりなど、きちんと手順を考えてしているのに、ふとした拍子に、つい、水道の蛇口をひねってしまうことが何度もありました。

そのたびに、目の前の大きなポリタンクを見て、苦笑いでした。

アラブの富豪が、日本のおみやげに水道の蛇口を買って帰ったという話がありますが、いつも出てくるのが当たり前と思っていた水道の水のありがたみを思い知らされた、4泊5日の小田原の断水騒動でした。

‘へんろ道’を歩いている時にも、水のありがたみをつくづく感じたものです。

弘法大師ゆかりの湧き水が、あちこちで喉の渇きを潤してくれましたし、青い海は、そばにあるだけで、いつも、むっちり豊かなエネルギーを私に与えてくれて、それが歩き続ける力となりました。

水は、科学的に極めて溶解能力の高い物質で、自

自然界のほとんどすべてのものは、水に溶けてしまうのだそうです。

37番、岩本寺から足摺岬へ向かう途中、四万十川を渡し船で渡りました。その時、私は四万十川を眺めながら、「水は、人の疲れや悩み、苦しみ悲しみも溶かし込んで流れているのかもしれない」と思いました。そして同時に、「人は、受け入れ難いことを受け入れるために、あるがままをあるがままに受け入れるために歩くのかもしれない」とも、思いました。

渡し船の上で浮かびました、「四万十川」お聴きください。

～ M5 四万十川 ～

高知県最後の札所、39番、延光寺への‘へんろ道’を歩いたのは、秋のことでした。

山里の秋の日暮れは意外なほどはやく訪れまして、‘へんろ道’はみるみるうちに真っ暗になってしまいました。

懐中電灯を片手に歩いていますと、1台の車がずっと私の横に止まりました。そして車のドアを開けて、60代ぐらいの女性が、運転席から声をかけてくださいました。

「もう、暗いですし、危ないですから、家へお泊まりなさい」

「先ほど見かけて引き返して来たのですよ」と言ってくださったのです。あたたかい言葉に胸がじんんとしました。

そろそろ高知を去るときが近づいていまして、寂しい気持ちでおりましたので、高知と離れ難い思いがますますつのりました。

延光寺のお参りを終え、松尾峠を越えて高知を去る時には、寂しくて胸がつまる思いでした。

高知県の最後に作りました曲、「へんろ道」をお聴きください。

～ M6 へんろ道 ～

足摺岬へ向かう途中、クリスチャンのお遍路さんに出会いました。

クリスチャンなのに遍路好きで、このとき遍路3回目とのことでした。

「どうしてクリスチャンなのに遍路が好きなのですか」ときくと、空を指差して、「神か仏にきいてください」との答えでした。

ちょうどこの方に出会った頃、東京に住む友人が私に「いい詩があるんだよ」といって、一遍の詩をおくってくれました。それは、キリスト教の本に載っている詩でした。

「足跡」朗読

～ M7 芽ぐみ ～

遍路をした1年9ヶ月の間、私は、日常で起こることもすべて、遍路の過程で与えられた課題であると捉えて、ものすごくいろいろなことを考えました。

ちょうどそのころ私はオカリナ奏者として活動して10年を迎え、自分が大きな転機にあることを実感していましたので、本当に必要なタイミングで遍路をし、そして、そのおかげで、多くの問題を乗り越えることができたと思っております。

「八十八か所を歩き終えたら、必ず違う人生があります」という、岩本寺のご住職の奥様の言葉。これは本当だと思っております。

遍路をして、いろいろな人に出会い、いろいろなことを感じ、考え、自分の内面が変わり、自分の内面が変わると、それに合うようにまわりの状況が変わってくることを、いま、実感しております。

その変化が、良かったか悪かったかは、神か仏にきかなければわかりませんが。



愛媛県に入って、私は自分の中に、これまでにはなかった他者への愛情が芽生えていることに気づきました。

香川県に入ってからは、大好きなうどんを食べ、お寺ではいつもたくさんの方が、私が到着するのを待っていてくれ、楽しい遍路をさせていただきました。

しかし、私の四国遍路がテレビ番組として放送されている以上、この旅の何らかの結果を出さなければならぬと焦りました。

結局、何の奇跡も起こらなければ、ちっともいい人間にもなれなかったことに、打ちひしがれてもいました。

遍路は、喜怒哀楽と進むのではないかと考えます。

そして、その心の変化は、札所の番号を年齢にあてはめると、だいたい人生と一致するのではないかと考えます。

徳島県は喜。1～23番 赤ちゃんから青年期。何もかもが新鮮な喜び。

高知県は怒。24～39番 漢和辞典で「怒」の字を引くと、怒るの他に、努力の努と同じ、はげむ、はげしいという意味もあります。高知県は、若者のはげみ、はげしさ、力。

愛媛県は哀。40～67番 哀と愛は対だと考えます。愛を知って哀しみを知るのでしょうか。人生やものごとの深みを知る時でしょうか。

香川県は楽。68～88番 最後に楽しむ時。ただし、楽と落は対と考えます。山道を登っている時に、「重力に逆らって登るのはたいへんなことだ」と思いました。そして、それと同時に、「重力は、ものにだけでなく、精神にも働いているのではないだろうか」とも思いました。楽がいつのまにか落にならないよう気をつけなければいけないと思っています。

今日は、私のような未熟ものの話に長時間おつきあいくださいまして、ありがとうございました。

来年のコンサートは、高知県立美術館ホールで12/2(土)に行く予定であります。

また、皆さまにお目にかかれますことを願っております。本日は本当にありがとうございました。



本谷美加子プロフィール

北海道帯広市出身。

帯広の高校を卒業後、単身オーストラリアに渡る。シドニーのストリートでオカリナを吹き始めたことが、オカリナ奏者としての道を歩むきっかけとなる。帰国後も新宿や池袋の駅前でオカリナを演奏。詩情あふれるオリジナルの旋律とオカリナの音色が街行く人々を魅了し、音楽関係者たちの注目を集める。

93年、CDデビュー。演奏活動をベースに、テレビ・ラジオ出演など幅広い活動を展開。NHK教育テレビ「トットウアンサンブル」のレギュラーを2年つとめる。

サントリー「続・のほほん茶」のCM曲「たんぽぽま」をはじめ、メディアで楽曲を取り上げられる機会も多く、卓越したメロディメーカーとしてオカリナブームの火付け役となった。

2001年から2002年にかけて、四国八十八ヶ所の歩き遍路に挑み、「祈り」をテーマにした創作活動に取り組む。その間、1年9ヶ月に渡り「風に抱かれて～本谷美加子の四国巡礼」がテレビ放映される。

これまでに9枚のCDをリリース。最新作は、「今、祈りの中で」